

『2022 年度学生生活実態調査報告書』刊行にあたって

本書は、学生センターが実施している「学生生活実態調査」の2022年度報告書です。

2020年の春から始まった新型コロナウイルスの感染拡大も、今年で三年目になりました。

現在も日々、多くの感染者数が報告されており、2020年や2021年をはるかに凌駕するものとなっています。しかしウイルスや感染症への人々の認識も大きく変わってきました。すでに海外ではコロナ以前と変わらない生活に戻りつつあることが報じられており、日本でも昨年までのような警戒心はなくなり、生活にも自由が戻りつつあります。

このことは学生たちの生活にも大きく影響を与えているように思われます。それを如実に示すのが、Q17「現在の学生生活の上で、特に不安に感じることにについて、あてはまることを選んでください。」の回答結果です。「コロナウイルス感染の不安」は2020年度が45.7%、2021年度が47.5%だったのに対し、2022年度は24.8%まで減少し、「友人に会えない、また新たな友人ができないこと」は2020年度が61.5%、2021年度が55.1%だったのに対し、2022年度は23.9%になりました。Q9「学生生活上の悩み・不安がありますか。」についても、「ある」と回答した人は36.7%で、2021年度の54.2%から大きく減少し、コロナ以前である2019年度の39.0%をわずかですが下回りました。やはり社会全体の雰囲気と同じく、学生たちの気持ちも明るい方向に進みつつあるものと考えられます。

一方、Q39「サークル活動に参加していますか。」について見てみると、「参加している」と回答した人は、コロナ後は2020年度41.8%、2021年度52.8%、2022年度48.7%と推移しており、回復傾向にあるとも言えますが、2019年度の56.8%と比べるとまだまだ元に戻すまでには至っていません。ただこれも、2015年度66.8%、2016年度66.7%、2017年度65.7%、2018年度62.3%という数値と比較すると、2019年度の時点ですでに減少傾向にあったとも考えられます。しかし、学年別で2019年度と比較してみると、1年生が69.9%から63.6%、2年生が56.0%から47.8%、3年生が50.1%から35.9%、4年生が45.2%から37.4%となっており、やはり2020年度の入学の3年生で減少が顕著であることが見て取れ、Q39-3「参加していない理由は、次のどれに該当しますか。」の回答では、3年生の48.0%が「サークル勧誘がなく、参加する機会がなかったから」を選んでいきますので、新型コロナウイルス感染症への対応が大きく影響していることが分かります。

これをキャンパス別に見てみると、別の側面も見えてきます。「参加している」との回答率を2019年度と比較してみると、市ヶ谷が56.2%から50.3%、多摩が56.5%から44.3%、小金井が60.7%から50.7%と推移しています。2022年度の全キャンパスの数値が48.7%であったことを考慮すると、多摩キャンパスにおける落ち込みが全体の数値に大きく影響しているものと考えられます。そこで、Q39-3「参加していない理由は、次のどれに該当しますか。」の回答を見てみると、「学業」「アルバイト」「金銭的負担」「人間関係」「サークル活動以外の活動」といった自己の都合は市ヶ谷より少ないのに対し、「興味の持てるサークルがない」については、市ヶ谷の28.8%に対し、多摩は35.3%と大きく上回っています。「サークル勧誘がなく、参加する機会がなかったから」については、市ヶ谷の22.4%に対し19.8%と下回っていますので、「興味の持てるサークルがない」という根本的な要因が大きいものと思われます。

これに対し、Q40「大学入学後、ボランティア活動を行ったことがありますか。」について「ある」と回答した人は、市ヶ谷の15.4%に対し多摩が19.6%と上回っています。Q40-2「きっかけは何でしたか。」を見ると、「サークルで参加」が市ヶ谷の31.0%に対し多摩が38.9%と上回っています。つまり、多摩キャンパスにおいてボランティア活動が活発な要因の一つは、ボランティア活動を行うサークルが充実していることに求めることができるわけです。やはり、魅力的なサークルが増えていくことこそが、サークル活動の活発化に直結していることは疑いありません。しかし現実には、この二年の間にいくつものサークルが解散を余儀なくされてきました。サークル参加率が60%を上回っていたかつての状況を取り戻すには、まず魅力的なサークルを増やしていくための支援が大切なのではないかと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大が始まってからの二年間、ともすれば学生生活実態調査は苦しい現状の確認に終始してきたとも言えます。しかし、この調査は本来、学生の皆さんの大学での生活をより良く改善していくための手掛かりを得るためのものだったのではないかと思います。先ほどサークル活動について簡単に考察を加えさせていただきましたが、この調査報告書を手にとられた皆様によって、調査結果が前向きに利用して頂けることを願ってやみません。

なお、昨年度の前言において、回答者が1200人とどまり、過去10年間で最低を記録したことを書かせていただきました。今年度の回答者は3190人で、過去最高だった2020年度の3685人に迫るものとなりました。回答者の増加には、Twitterを利用するなどの担当者による周知の工夫が有効に機能したものと思われます。今後も更に回答者を増やせるよう、学生センターとしても工夫を重ねていきたいと考えております。

最後に、本調査の分析については、市ヶ谷副学生センター長の猪狩良介先生（経営学部）にお願いしました。分析の詳細につきましては、猪狩先生による「調査結果に関する報告」をお読みいただければと思います。

2022年12月
学生センター長 齋藤 勝